

はじめに

一九六〇年代の合理化と技術進歩は、日本の経済や企業だけではなく、私たちの職場や労働組合にも影響をあたえています。

省力投資・技術革新投資や下請化の進行、労務管理強化といった合理化のなかで新しい労働問題が生まれ、労働者の構成や意識のなかにも大きな変化や影響をもたらしました。当然のこととはいえ、労働運動の指導や政策の決定にも変動が生まれ、これらの動向にベースをあわせるといふことで、産業政策の重視が強調され、一部労働組合のなかでは新しい労働戦線の統一が主張されています。国際化時代・大型合併時代に対応して労働運動の基本戦略をさえ転換することが論議されています。とくにこのような動きが重化学工業を中心とした大企業労組を中心に活発化していること、この動きが産業別労働組合やその指導を軽視し、大企業労組の運動とその利害に、これを従属させる方向で進められつつあることは重要です。ここ数年の運動と実績は、大企業の主唱する「福祉国家に福祉企業」という企業内封じ込めの労働組合対策と、労務管理政策が実効をあらわし、労働者の状態を生産性の増大と企業の発展に従属させる動きが強まっていることを教えています。このままで推移すれば、大型合併のなかで再編成された資本の手による企業労連ぐるみの「丸がかえ御用化」がすすみ、総評を中心とした産業別労働運動とその指導さえも、これらの資本別労働運動の利害に従属させられ、引きまわされる危機

を感じさせます。

一方資本の側では、企業の社会的責任を強調し、資本主義の変質論を宣伝しつつ、政治闘争
Ⅱ「政治はいけなないのだ」と繰り返しつつ、彼ら自身の政治的目的を達しようとする動きを強めています。

この本は第一冊（『職場の労働運動——要求づくりと団体交渉』）に引きつづき、このような組織攻撃の根底にある企業主義と対決し、労働者の生存権要求と人間性の回復を出発点として、労働運動とは何かを考えなおし、労働組合の戦闘性の回復とその方法を、六〇年代の仲間たちのたたかひの教訓のなかにもとめることに主点をおいて追求したものです。

まず第一に最近の合理化反対闘争の経験と教訓に学び、新しい労働問題——社会問題の発生とその実態を明らかにし、労働者の生活・雇用・職業上の権利をまもるたたかひの方法論を探るなかで、労働者と組合の団結強化の課題を導き出そうとしたものです。このなかで、大型合併・合理化がもたらす新しい変化と問題を資本主義の変質論と直結させ、これにベースを合わせて戦略展開をおこなおうとすることの危険を指摘し、自らのたたかひと努力を重視して、あくまで「自らを変え、相手を変える」ことを基本に問題解決の手段を追求してみました。

第二には、合理化と組織攻撃の結節点をさぐり、その教訓のなかから組織と組合運営の弱点と分裂攻撃の関連性を追求し、このなかから統一している労働組合の組織強化の方針と方法を導き出す作業を試みてみました。「分裂は攻撃である」ことの側面は、多くの機会や著作で強調してきましたが、ここでは「攻撃がどんな弱点と結びついたとき、大さわぎ」になったか」

の教訓に学ぶことに重点をおいて、組合不信と不団結の原因について考えてみました。

第三には、合理化のなかの組織づくりにとって、古くして新しい課題である職場闘争を一度ふり返ってみ、職場闘争の歴史・経過・変化をたどりながら、一つの位置づけをおこなう努力をしてみました。とくにここでは労働組合の本来的な機能である団体交渉Ⅱ労働協約づくりの活動と結び合わせながら、その役割と任務を明らかにすることに努力を集中しました。

この本を第一冊とあわせ読んでいただきご批判いただければ幸いです。第一冊と同様に全国の私鉄バス労働者をはじめ、働く仲間たちと組合のたたかいがあつてはじめて生まれたこと、とくに日頃から暖かい友情と好意を寄せくたさる多くの人びとの協力で生まれたことを感謝します。編集・装幀・漫画など第一冊同様に各位のご協力によるものです。

なお、第四章「喜びも悲しみもたたかいても——組織づくりと職場闘争」以下は、『権利闘争前進のために』（総評権利憲章第一次草案・労働旬報社）のうち、私が担当し執筆した部分（二九二頁、職場交渉について以下および二七五頁、Ⅲ協約闘争を組織するにあつての基本態度）をもとに加除補筆したものであることをお断り申し上げます。

一九七〇年四月五日

内山 光雄